

第1章

安倍暗殺を再考する

— 日本を「第2のウクライナ」にしないために



安倍晋三元総理が、近鉄奈良駅前で応援演説中に銃撃され死去

<https://www.globalresearch.ca/when-globalists-crossed-rubicon-assassination-shinzo-abe/5786559>

1

一刻も早く「研究所・薬草・薬木・花だより」を書きたいのですが、なかなか時間がとれません。昨日はシルバー人材センターのひとに御願いで庭の桂の樹木3本を伐採してもらったので、その後始末に追われていました。

頼まれた講演が2つもあって、その準備に追われたり、『翻訳NEWS』の素材情報を翻訳グループに送るという作業に時間をとられてるうちに、庭木の伐採にかかる時間がなくなってしまい、四月に入ってやっとその時間がとれたというわけです。

昨日、懸案だった庭木の伐採も終わったので、今やっとブログ原稿を書く時間ができました。しかし、いざ「研究所・花だより」を書こうとしたら、「トランプ前大統領の起訴」「ウクライナ軍の拠点バフムート陥落」というニュースが飛び込んで来たので、やむを得ず、こちらの記事を優先することにしました。

2

まず「ウクライナ軍の拠点バフムート陥落」ですが、次の記事は「民間軍事会社ワグナー

軍団の指導者プリゴジンがバフムートを陥落させたという記事です。

(日本ではワグネル軍団と一般には称されていますが、作曲家ワグナーを軍団の名称にしているものです。それに対抗してアメリカの悪名高い民間軍事会社はモーツアルトと称しています)

* Ukrainian army 'almost destroyed' - Wagner chief「ウクライナ軍は『ほぼ壊滅状態』- バフムート市の防衛に固執すれば、ウクライナは大きな被害を受け、この戦争の運命を決することになる可能性がある」と、ワグナー軍団代表エフゲニー・プリゴジンは主張」

<http://tmmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1398.html> (『翻訳NEWS』2023/04/04)

これでウクライナ軍における三つの拠点(マリウポリ市の巨大な製鉄所、ソレダル市の「巨大な地下要塞」、要衝バフムート市)の全てが陥落したことになります。

ゼレンスキー大統領は「バフムートを死守せよ、玉砕しろ」と呼びかけていますが、かつて日本軍が沖縄戦で「玉砕しろ」と命令し、沖縄住民にまで自決を強制したことを思い出させる残酷・冷酷な作戦の指導です。

米軍のマーク・ミラー統合参謀本部議長すら「キエフ政権の主要軍事目標の達成は、非常に困難」と指摘していますから、ゼレンスキー大統領の発言は、アジア太平洋戦争における敗戦間近の日本軍を思い出させるものです。

次のミリー統合参謀本部議長の発言はキエフ政権の未来に暗い影を投げかけています。

* Top US general skeptical of Ukraine's prospects (米軍トップの将軍がウクライナの見通しに懐疑的)
<https://www.rt.com/news/573952-milley-ukraine-difficult-task/> 31 Mar. 2023

ゼレンスキー大統領は「クリミアを初めとするウクライナ南東部の全てを奪還するまで戦う」と言っていますが、ミリー将軍にしてみれば荒唐無稽な目標に見えるのでしょうか。

3

ところがバイデン大統領は相変わらずキエフ政権に「最後の一人まで戦え」と言って、ロシアの弱体化・政権転覆を目指しています。バイデンにとってはウクライナはロシア壊滅のための捨て駒なのですから、それも当然のことかも知れません。

ここに文人であるバイデン大統領と軍人であるミリー将軍の見通しの違いがあります。ミリー将軍にとってはウクライナ軍の敗北は明らかなのですから、無駄にウクライナ軍兵士(そして裏でこっそり参加させている米軍特殊部隊)を死なせたくなのです。せっかくロシア軍が逃げ道を用意してくれているのですから、一人でも生かしたいわけです。

非常に興味深いことに、元自衛隊の高官であった矢野義昭氏(元陸将補、現在は岐阜女子大学

特別客員教授)の軍事解説も、ミリー將軍と同じことを語っています。この情報は知人の佐木さん(仮名)から送られてきたものですが、この発言は二月二四日のものであることに注目してください。

*「最新のウクライナ情勢。パフムート陥落、ロシア勝利の可能性大」矢野義昭

<https://www.youtube.com/watch?v=zCZgITtElzw> (AJER2023/2/24)

やはり軍人であった矢野義昭氏には、現在のウクライナ情勢は文人であるバイデン大統領や岸田首相とは違って見えるようです。

バイデン大統領に見えるのは、マツキンダーの「ハートランド理論」にもとづく世界地図だけで、いかにロシア(そして最終的には中国)を封じ込めるかに焦点がありますから、アメリカ本土さえ攻撃を受けなければウクライナやEU諸国がどうなろうと知ったことではないのです。

次頁の地図は櫻井ジャーナル(2023/03/28)に載っていたものですが、従来の「ハートランド理論」を描いた地図と違い北極を中心に描いていて、「ユーラシア大陸の心臓部を支配する国が世界を制覇できる」という理論が、いっそう理解しやすいものになっています。しかも、

米英の長期世界制覇戦略



ハートランド理論の地図 <https://plaza.rakuten.com.jp/condor33/diary/202303280000/>

記事は「ウクライナでの勝利を諦めた米政府は東アジアへの『転身』を図っている」という題名になっています。

つまり見るひとが見れば、ウクライナの未来は見えてしまっているのですが、岸田首相の眼にはバイデン大統領の言動しか映っていないので、相変わらずワシントンの意向どおり、ロシアにたいする経済制裁に勤しんでいます。そのような示すのが次の記事です。

* Japan bans exports of kids' toys to Russia 「日本は、子どものおもちゃのロシアへの輸出を禁止」

<http://rmmethodblog.fc2.com/blog-entry-141.html> (『翻訳NEWS』2023/04/06)

日本のロシアにたいする姿勢は「ブーメラン効果」をもたらし、EUと同じように経済を悪化させるでしょう。まさに自殺行為すなわち「HARAKIRI(腹切り)」です。

なぜならバイデン大統領の言いなりになってロシアへの経済制裁に加担し、みすみす「ロシアという巨大市場」を失うわけですから、国民にたいする裏切り行為でしょう。

ドイツの外務大臣が「国民の意向がどうあろうと私はロシアへの経済制裁を強め、ウクライナへの武器輸出も厭わ^{いと}ない」と言って、国民からの総反発を受けました。いまやドイツもアメリカの忠実な下僕^{しもべ}になってしまいました。

そのドイツではロシアにたいする経済制裁の「ブーメラン効果」で、生活費は高騰し、国民は「ゼネラルストライキ」で政府に反撃を加えています。次の記事は「数十万人の公共交通機関の労働者が職場を離れ、国内の動きは停止した」ようすを報じています。

* 'Mega strike' hits Germany 「ドイツ『巨大ストライキ』で交通停止——生活費上昇で大幅な賃上げ要求」
<http://timmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1362.html> (翻訳NEWS | 2023/03/28)

フランスも同じような状況に追い込まれています。マクロン大統領は年金改革に反対する全国的な抗議デモを抑えるのに悪戦苦闘しているからです。100万人を超えるデモ隊が

全国で街頭に繰り出し、治安筋はパリの政府にたいする「暴動」と表現するほどでした。

* Violent protests grip France — RT World News

「マクロン大統領の年金改悪に反対する100万人以上のデモで、警察がデモ隊と衝突」

<http://timmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1355.html> (翻訳NEWS | 2023/03/27)

数万人の労働者がストライキをおこない、デモ隊は公共交通機関、学校、石油精製所を封鎖しました。パリでは少なくとも消防士の1部隊が寝返って、デモ隊に合流し、複数の目撃者は、この状況を「制御不能」と表現しています。

ヒトラーの「パリは燃えているか」ではなく、「パリは戦場だ、気をつけろ」と、ある独立メディアはツイートしています。ボルドー市では、市庁舎の入り口が燃やされる事態も生じました。市民が投稿した次の動画で、そのようすを見ることができます。

* <http://t.me/geopoliticalblog/5808> (動画17秒)

国民の不満の爆発は、マクロン大統領が来年から定年を62歳から64歳に引き上げると発表したことでした。マクロン大統領は、国民年金制度の破綻を防ぐために、この変更が必要であると主張していますが、国民にしてみれば「キエフにやるお金や武器があっても年

金を救う金はないのか」と憤っているのでしょう。

（一方、60歳から一気に65歳に定年が引き上げられ、60歳からはこれまでの年俸の半額近くに減額されてしまうというのが日本です。定年延長への反対がほとんど起きなかった日本はどういう国なのか、と思つてしまいます。）

5

日本はEU諸国ほどロシアにたいする経済制裁の「ブーメラン効果」が眼に見えて顕れてきていないので、ドイツやフランスのような騒乱状態になっていませんが、バイデン大統領の言いなりになっていけば、早晚、同じ状況が日本にも生まれることは間違いないでしょう。

岸田政権は、菅義偉^{すがよしひで}内閣が総辞職し、その後継政権として発足したのですが、「岸田氏は原爆を投下された広島出身だから、安倍政権よりも平和志向の内閣になる」と予想したひともいました。が、結果は逆でした。

安倍晋三氏は、「森友学園への国有地売却に関する財務省決裁文書の改竄^{かいざん}」をめぐる自殺者まで出させることになったり、「桜を見る会に関する問題」でも東京地検特捜部によって安倍氏の公設第一秘書（後援会代表）が政治資金規正法違反で略式起訴されるなど、

多くの問題を抱えていました。

が、それでもプーチン大統領を山口に呼ぶなど、ロシアへの制裁一辺倒にはなりません。それに反して岸田首相は、「広島出身者のハト派内閣」を期待していた国民の期待を裏切り、ロシアにたいする強い制裁へと大きく舵を切りました。

ゼレンスキー大統領が「ユダヤ人大統領」という顔を利用しながら、ネオナチを閣僚として政権に入れ、前大統領よりもいっそう露骨にロシアとの戦争にのめり込んでいったのと似ていると言えます。バイデン大統領にとっては安倍氏よりも利用しやすい人間だったわけです。

安倍晋三氏の暗殺も、これと深く連動していることを考察したものが、シンシア・チュン女史の次の論考(1)です。情報としては少し古いのですが、今の事態を理解するのに役立つと思います。(1)は(2)の続編で、(3)を下敷きにして書かれています。

(1) Why Shinzo Abe Was Assassinated: Towards a 'United States of Europe' and a League of Nations
「安倍晋三はなぜ暗殺されたのか：そうじには『欧州合衆国』と国際連盟樹立を目指す構想がある」
<http://mmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1429.html> (翻訳NEWS|2023/02/06)

(2) Is Japan Willing to Cut Its Own Throat in Sacrifice to the U.S. Pivot to Asia?
「日本は、米国の『アジア基軸』に追従して自らの首を絞めるのか？」

<http://mmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1290.html> (『翻訳NEWS』2023/03/04)

(3) When the Globalists Crossed the Rubicon: The Assassination of Shinzo Abe

「グローバルリストたちはルビコン川を渡ってしまった：安倍晋三暗殺の真実」

<http://mmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1412.html> (『翻訳NEWS』2023/04/06)

結論から先に言えば、安倍氏はロシアに対してキツパリした態度を示さなかったが故に消されたというのが、(3)を土台にした(1)の結論であるように思います。

トランプ前大統領がロシアを敵対視する態度を明確に示さなかったがために、「プーチン大統領の操り人形」だと非難されたり、いわゆる「ロシアゲート」といった根拠のない疑惑で捜査を受けたりしたのとそっくりです。

そしてトランプ氏は、今もなお新しい疑惑で訴追されようとしています。今まで辞めから訴追された大統領はいないので、これがいかに前代未聞の大事件であるかが分かります。ネオコンと呼ばれるひとたちの、ロシアへの憎悪がそれほど強いものだという点でもあります。

* Indicting former President Trump (トランプ前大統領にたいする訴追)

<https://www.rt.com/podcast/573944-trump-indictment-evidence-hunt/> Apr 1, 2023

かつてアメリカの意向に逆らって（あるいはアメリカの意向を知らずに）独自外交をおこなった元首相の田中角栄氏や鳩山由紀夫氏も、牢屋に入れられたり退陣に追い込まれたりしています。アメリカによる裏の画策ではなかったのかと疑われている理由です。

二〇〇〇年にロシア連邦大統領に初就任したプーチン氏が、就任後に会った初めての外国の政治家が鈴木宗男氏でした。しかし彼も「親露派」と見なされ、いわゆる「鈴木宗男事件」で逮捕されました。これも、同じ類いの事件だったと推測されています。

これを見ると、「アメリカの仮想敵国」と仲良くするというのは政治生命をかけた冒険だということになります。

元大統領ケネディが暗殺されたのも、キューバのカストロ政権転覆計画に消極的であったり、キューバ危機でソ連のフルシチョフ首相と妥協して危機の解決を図ったとして、「闇の政府 (Deep State)」からの反発を買ったからではないかと疑われています。

トランプ前大統領も最初の大統領選挙に立候補したとき、「CIA解体」「ケネディ暗殺事件の調査記録の公開」を公約したにもかかわらず、大統領在職時代に公約を実行でき

ないまま退陣せざるを得なかったことは、いかにその壁が厚かったかを示しています。多分それを実行するとケネディと同じ運命をたどることになりかねないと恐れたのでしよう。

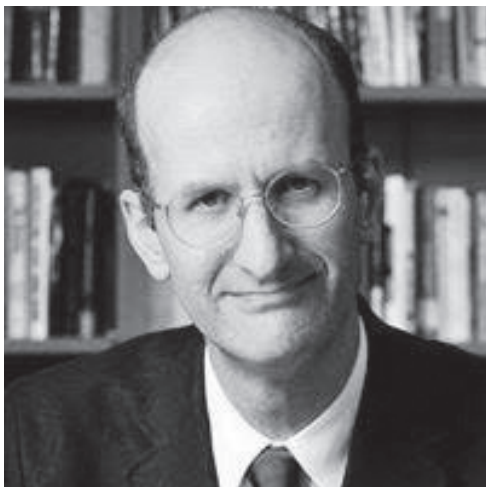
7

話が少し横に逸れたので、もう一度「安倍晋三暗殺」事件に戻ります。

先にシンシア・チュン女史の論考(1)(2)を紹介しましたが、これはエマニユエル・パストリッチ(アジア研究所・所長)の論考(3)を下敷きにしたものでした。その全てをここで紹介できませんので、以下ではこの(3)だけを取りあげることになります。

(3) When the Globalists Crossed the Rubicon: The Assassination of Shinzo Abe
「グローバルリストたちはルビコン川を渡ってしまった…安倍晋三暗殺の真実」
<http://innmethod.blog.fc2.com/blog-entry-1412.html> (『翻訳NEWS』2023/04/06)

というのは、私が二月二三日(木)の講演会で「コロナ騒ぎとウクライナ問題をつなぐもの」という講演をしたとき、午後の講演では船瀬俊介氏が「安倍晋三元首相の暗殺事件」を取りあげていたからです。



しかし船瀬氏は「安倍を殺したのは誰か」というテーマで語りながら、結論は「山上徹也容疑者が殺したのではなくスナイパーだった」という平凡なものだったので驚きました。

というのは、犯人とされた山上徹也容疑者が使った銃は殺人用にはあまりにもお粗末でしたから、この報道を聞いたとき私はすぐ真犯人は別にいると思っただけです。

私たちが知りたかったのは「そのスナイパーの背後にいるのは誰か」ということだったのに、船瀬氏は、そのことにほとんどふれることなく講演を終えたのです。氏がしきりに繰り返しかえしたのはスナイパーの発射した二連銃の消音「プシュ、プシュ」ばかりでした。

ケネディ大統領が暗殺されたとき、約1時間後に逮捕され犯人とされたリー・ハーヴェイ・オズワルドは2日後にダラス警察署でジャック・ルビーに銃撃されて死亡し、事件は迷宮

入りとなりました。

しかし現在、ケネディを殺したのはオズワルドだったと考えるひとは誰もいないのではないのでしょうか。ウォーレン委員会の公式調査報告は事件をオズワルドの単独犯行として大統領は後方から撃たれたと結論づけたのですが、ライフル銃の軌道や後方に飛び散ったケネディの脳みそなど、周囲の状況証拠からすると疑問が多すぎるからです。

それはオリバー・ストーン監督の映画『JFK』でもさまざまに検証されていますが、同じことは安倍元総理の暗殺についても言えます。山上容疑者による暗殺にはあまりにも疑問が多すぎるからです。だとすると別に真犯人がいるのは確かだとして、問題はその後誰がいたのかということでしょう。

8

先述の論文(3)の著者エマニュエル・パストリッチ(Emanuel Pastreich)は、この論文のなかで次のように述べています。(以下、和訳はすべて寺島)

ブロガーの北川高嗣氏は七月一〇日、安倍晋三元総理は山上が立っていた後ろからではなく前から撃たれ、駅前広場を挟んだ交差点の両側にある高いビルの上、あるいは両方から斜めに発射されたに違いないとする資料を掲載した。

事件の日の夜に外科医が「弾丸は2発あった」と発表するまで、マスコミは、根拠なく「安倍元総理は1発しか撃たれていない」と主張していたが、北川の弾道分析は、マスコミの発表よりも科学的なものだった。

人混みの中、かなり離れたところに立っていた不格好な自作銃を持った男が、安倍元総理に2発当てることのできる可能性は低い。銃の専門家であるタレントの小園浩己は、七月三日放送の『スッキリ』で「そんなことはありえない」と発言している。

ここでパストリッチ氏が取り上げているブロガーの北川高嗣氏の投稿とは次頁のような説明付きの画像でした。

私は、エマニュエル・パストリッチ氏はアメリカ人でありながら、このように日本人によるブログ投稿にまでも目をおしていることに驚かされました。そこで氏の経歴を調べて見ると、ウィキペディアには次のように書かれていました。

「Emanuel Pastreich (1964/10/16〜) は、アメリカ合衆国テネシー州ナッシュビル出身。主に韓国で活動している。慶熙大学校副教授。アジア研究所 (The Asia Institute) の所長と地球経営研究院の院長を兼任し、また同時に、国際脳教育総合大学の副総長を務める。東アジア古典文学および現代国際関係、科学技術に関連した政策提案をしている。」



このような経歴をもつパストリッチ氏は、先述の論文のなかで、さらに次のような興味深い経歴を交えて、「自分が日本とどのように関わってきたか」を説明しています。

ワシントンでも東京でも、その他の場所でも、責任ある知識人や市民にとって、この不透明な暗殺事件に対する有効な対応はただ一つである。

それは国際的な科学的調査の要求である。そのプロセスは痛みを伴うかもしれないが、我々の政府がいかに見えない力に乗っ取られているかという現実に向き合うことを強いることになるだろう。

しかし、舞台の裏にいる真の陰謀団を特定しない限り、非難の矛先が各国の首脳陣に向けられたり、国同士が戦争に巻き込まれることになりかねない。それは、真犯人である世界を股にかける金融業界の罪を見えなくする。

日本政府が軍部によって支配権を奪われた最後の事件は、一九三二年五月一五日の犬養敬首相、一九三六年二月二六日の齋藤実首相の暗殺事件だといえる。

ただし国際社会という舞台から見て安倍元総理暗殺との関連をより強く感じさせる事件と言えば、一九一四年六月二八日のオーストリア・ハンガリー帝国のフランツ・フェルディナント大公暗殺事件だろう。この事件は、ロスチャイルドやウオーバーク財閥などの銀行が利益を得るために世界経済を統合しようとした魂胆から引き起こされたものだ。それが、第一次世界大

戦へと繋がってしまった。

私がこのような文章を書くのは容易ではない。

私は若い頃から日本の文化に深い関心を持ち、「源氏物語」から夏目漱石の小説まで幅広く日本文学を読んで深く感銘を受けたアメリカ人である。私はアメリカの大学で日本文学専攻の教授を10年勤めた。その前は東京大学の大学院で博士課程まで勉強した。私にとっては日本ほど馴染みがある国はない。

私が経験したアメリカの9・11の事件と同じく、この暗殺を口実にして権力に抗う市民を政府が弾圧するようになることを懸念する。この事件の国際調査のために日本人と一緒に努力したい。日米同盟は真実のための同盟であるべきで、平和のための同盟でもあるべきであり、多国籍企業に対抗する同盟であるべきである。

9

このようにパストリッチ氏は、「源氏物語」から夏目漱石の小説まで、幅広く日本文学を読んで深く感銘を受けたアメリカ人であることに、まず驚かされます。

また、一九三二年五月一五日の犬養毅^{いぬかい}首相、一九三六年二月二六日の斎藤実^{みやま}首相の暗殺についても言及しているのです。日本人でも、このような歴史を知っているものが、現在の若者にどれだけいるでしょうか。

それはともかく、パストリツチ氏は韓国に在住しながら日本の動向にも注意を払ってきたのですが、その氏の眼からすると、安倍暗殺は世界の政治家にどのようなメッセージを送ったのでしょうか。それを彼は次のように述べています。

安倍元首相の白いシャツに赤で描かれた（つまり銃弾による血の）メッセージは、「グローバリストのシステムを受け入れ、コロナ体制を推進しても」「G7加盟国のリーダーであっても」己の身の安全を保証するのに十分ではないというものだった。

安倍元首相は、世界中の国民国家の統治を蝕む隠れた癌、つまり組織的な病気の犠牲者として、これまでに最も高い地位にあった。

この癌、この病気が、国民政府から意思決定権を奪い、民間のネットワークの中にその決定権を移行させようとしている。そのネットワークにたむろしているのは、イスラエルのテルアビブやロンドンやワシントンDC近くのレストン市にある、スーパーコンピュータを有する銀行、民間投資グループ、雇われ諜報機関などだ。さらには世界経済フォーラムやNATOや世界銀行などの、恐ろしい組織に雇われた政策立案者たちでもある。